九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ナチ時代におけるドイツ田園教育舎の位置付けをめぐる論議 : H.リーツ『回想記』の再版に関するA.アンドレーゼンの主張を中心に

江頭, 智宏
九州大学人間環境学研究院教育学部門教育社会計画学講座

https://doi.org/10.15017/8051

出版情報：大学院教育学研究紀要. 8, pp.85-100, 2006-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2005，第８号(通算第51号)，85-100
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.8, 85-100

ナチ時代におけるドイツ田園教育舎の位置付けをめぐる論議

── H.リーツ『回想記』の再版に関するA.アンドレーゼンの主張を中心に ──

江　頭　智　宏

１．はじめに

ドイツ田園教育舎（Deutsches Landerziehungsheim）の創始者ヘルマン・リーツ（Hermann Lietz, 1868-1919）が1919年に亡くなったのを受けて，後継者としてアルフレッド・アンドレーゼン（Alfred Andreesen, 1886-1944）がヘルマン・リーツ学校の総指揮官に就任した。アンドレーゼンの就任を契機とするヘルマン・リーツ学校の方針転換は先行諸研究によって指摘されているところである[(1)]。1933年１月にヒトラー内閣が成立した後，他の田園教育舎系学校も含めて，新教育の理念に根差した多くの教育機関が閉鎖へと追い込まれる中にあって，ヘルマン・リーツ学校はナチ時代においてもドイツ国内で存続した。また1933年９月に，ヒトラー内閣への賛同を示した「ドイツ田園教育舎ライヒ組合」（Reichsfachschaft Deutsche Landerziehungsheime）が結成された際，ヘルマン・リーツ学校は６校が名前を連ねるとともに，アンドレーゼンはライヒ組合の長に就任した[(2)]。

このようなナチ時代を対象としたアンドレーゼン研究において，近年の研究史で焦点となっているのは，アンドレーゼンがナチズム信奉者として確信的にナチ体制に「同調」したのか，あるいは田園教育舎を存続させるために止むを得ず「同調」したのか，ということである[(3)]。こうした問題の解明自体は重要であるが，本稿は新教育の教育実践・教育理念のナチ時代への「連続性」の問題を考察するものであり，その立場から，アンドレーゼンがリーツと田園教育舎をどのようにナチ時代へ「継承」させたのかという点に焦点を当てる。

先行研究においても，こうしたアンドレーゼンによるリーツと田園教育舎のナチ時代への「継承」という問題は言及されてきた。ファイデル＝メルツは，ヘルマン・リーツ学校には伝統的に「非ドイツ的」，「非ゲルマン的」要素を排除する傾向があったこと，そして第一次世界大戦下のヘルマン・リーツ学校は英雄崇拝の傾向があったこと等を指摘し，ヘルマン・リーツ学校はナチ的な要素をも包含しうるものであったため，「アンドレーゼンはナチ体制と一致させるためにリーツの遺産をわざわざ悪用させる必要はなかった」と述べている[(4)]。またケレンツは，『教育』（Die Erziehung）や田園教育舎の雑誌『生活と労働』（Leben und Arbeit）を取り上げ，アンドレーゼンがヒトラーとリーツとの間の精神的親縁性を再三にわたって主張していたことを指摘した。そして結論として，「全体的にアンドレーゼンは，最初は明らかに喜んで，終わりのころは抵抗力がなかったためにリー

ツをナチ時代の思想へと統合した」と述べている[5]。他にも管見の限り多くの論稿が，公刊された著書と雑誌論文に依拠しながら，アンドレーゼンがリーツとナチズムとを結び付けたことについて言及している[6]。

もちろんアンドレーゼンがリーツとナチズムとを関係付けた史実については筆者も同意するものであるが，先行研究ではアンドレーゼンが両者を関係付ける過程についての考察がなされておらず，結果的にアンドレーゼンが両者を無条件的に結び付けているとの結論になっていることに疑問を呈する。そのため本稿では，さらに史料を掘り下げてリーツとナチズムを関係付ける際のアンドレーゼンの認識に迫り，アンドレーゼンが両者を関係付ける過程においてリーツの教育実践・教育思想をナチ体制に順応させるように意図的に書き換えたという側面に焦点を当てる。そこから，リーツの教育実践・教育思想は，アンドレーゼンによる意図的な再解釈を経てナチ体制に「継承」されうるものであったことを論じるものである。

以上のような関心のもとに，本稿では，リーツ自らが著した自伝であり，リーツ研究における重要な史料としての性格をももつ『回想記』(Lebenserinnerungen) に焦点を当てる。『回想記』はヴァイマール時代には第3版までが出版されるが，アンドレーゼンはヒトラー内閣成立の1933年に再版を主張し，結果的に1935年に，アンドレーゼンの編集のもとで第4/5版として再版される。本稿はこの間のアンドレーゼンの主張を主たる対象とするものであり，その際に史料として，コブレンツ連邦文書館のリーツの文書に所蔵されている，『回想記』の再版をめぐるアンドレーゼンとヘルマン・リーツ夫人ユッタ・フォン・リーツ (Jutta von Lietz) の往復書簡を用いる。ユッタ・フォン・リーツは，最初の女子田園教育舎を設立したベルタ・フォン・ペーターゼン (Bertha von Petersen) の娘でもある[7]。再版を押し進めるアンドレーゼンに対してユッタ・フォン・リーツは改訂および再版に断固とした反対の立場を取り，最終的には，再版に責任をもつヘルマン・リーツ財団を訴えることになる。また本史料は，アンドレーゼンが身近な同志であるユッタ・フォン・リーツに宛てたものであるため，先行研究が依拠してきた公刊された著書や雑誌論文よりも，アンドレーゼンのより率直な見解を知ることができる可能性をもちうるものである。

以上のような研究状況および史料状況を踏まえたうえで，本稿では，『回想記』の再版に関する背景にも言及しながら，『回想記』を再版するにあたってのアンドレーゼンによるリーツおよび田園教育舎の書き換えについて論じることを目的とする。

2.『回想記』第4/5版の再版の背景

『回想記』第4/5版によれば，リーツは1918年に『回想記』の口述筆記を開始したが，すでにその時点では病床の上にあり，翌年の6月12日に生涯を閉じた。リーツの生前中には完成しなかった『回想記』であったが，翌年の1920年に，リーツの教え子マイスナー (Erich Meißner, 1895-1965) によって初版が出版され[8]，1921年には第2版，1922年には第3版と続けてマイスナーの編集で出版される。ドイツ田園教育舎の年刊誌第17号『労作学校とドイツ田園教育舎』は，第2版の

『回想記』について，「ドイツ民族の美しく，高貴で，偉大な側面がこの本の中で共鳴し合っており，現在の私たちの不透明な日々の中にあって，自省と自己革新をこの本は与えてくれます」[9]と宣伝している。第一次世界大戦の敗戦による混乱の中にあったドイツ国民やドイツ社会に対してひとつの指針となるような一人のドイツ人教育者の生涯というものが，『回想記』の「売り」であったことが窺われる。

『回想記』はヴァイマール時代には第3版までしか出版されず，先述したようにヒトラー内閣の成立を契機としてアンドレーゼンは『回想記』の再版を計画するが，アンドレーゼンは自分が編者ではない初版から第3版までの『回想記』を決して否定的にとらえていたわけではなく，むしろ積極的に評価していたと言える。たとえば『教育』の1927年の第7分冊に掲載された論文「リーツと田園教育舎および自由学校の運動」の中で，「この『回想記』という文学作品もまた，実際の人間の単なる弱々しい再現でしかないにしても，リーツの『回想記』を読んだ人は誰であれ，リーツの生き生きとした根源的な力の足跡になお共感するであろう」[10]と述べている。また『児童保護と青少年保護に関するハンドブック』においても，アンドレーゼンは担当した「田園教育舎」の項目で，以下のように『回想記』を評価している。「大変に読む価値のあるリーツの『回想記』は，心情と行為および精神と意志とがひとつになっており，惑わされることのない道徳的判断に満ちているような，まれに見る気質をもったリーツという人物を示している。」[11]

このように，ヴァイマール時代の『回想記』はマイスナーの編集ではあるが，アンドレーゼンにとってはそれ以上にそもそもリーツの遺稿であるという思いの方が強かったのである。そしてアンドレーゼンは，著述ではなく実際の行動を重んじる人物であったリーツを著作によって評価することに留保を示しながらも，リーツに学ぶ際において彼の人生そのものである『回想記』は少なくとも必読の書であるととらえていたのである。つまり旧版の『回想記』を賞賛していたアンドレーゼンが再版を主張したことは，ヒトラー内閣の成立を契機として彼がリーツの位置を故意に転換させたことを示すことになるのである。

アンドレーゼンは『回想記』の再版を主張した理由として，書簡の中で以下のように述べている。

> 「私はプロパガンダについてヒトラーがもっている類まれな天才ぶりを，リーツの本の中で参照するように指示します。（中略）目下焦眉の教育課題に対する態度を決定しており，1918年に書かれて1919年に改訂された本を，今日改訂せずして出版されることは当然ながらありません。（中略）1919年の心性を私たちはもはや持ち合わせていないのです。」[12]

ナチズムとヒトラーの中にリーツの教育実践・教育思想とのつながりを見出したアンドレーゼンは，リーツにとっても新たな時代の始まりであろうと考えられるヒトラー内閣の成立を，『回想記』の再版にとって絶好の機会ととらえた。ただしその際には，本稿で以下に論じていくように，ナチ体制に順応させるように内容を改訂することが必要と考えられたのである。

一方で『回想記』の再版に反対するユッタ・フォン・リーツは，アンドレーゼンからの『回想記』

の改訂版の草案を見た上で以下のように述べている。

「『回想記』の出版にあたって，出版される時期というものは重要ではないと私は思います。私は時代に適合することを拒否するものでありまして，各人は自分にとって重要であるものを自分自身で本の中から汲み取らなければなりません。現在あなたが提起している『回想記』の草案は，かつての『回想記』よりもヘルマン・リーツの恩恵をより強調しているとは認められません。『回想記』の改訂は重要なこととは私には全く思えず，もしかすると部分的に『回想記』の質を低下させることになるかもしれないことを危惧します。」(13)

ユッタ・フォン・リーツは，アンドレーゼンのような「時代に媚びた」立場から距離を置いており，「質の低下」も示唆しながら，『回想記』の改訂そのものを全く認めていないことが窺える。

こうしたアンドレーゼンとユッタ・フォン・リーツの間での書簡のやり取りの全般的な経緯についてハーナウの地方裁判所の記録は以下のように記している。

「1933年から34年にかけて，原告（ユッタ・フォン・リーツ－引用者）と，首脳部のメンバーではないがヘルマン・リーツ財団の上級指導者であったアンドレーゼン博士との間で文通が発展していき，『回想記』の改訂についての話し合いがなされた。その際に，お互いに様々の相違が生じ，とくにアンドレーゼン博士は『回想記』の様々な変更を企てようとした。それに対し原告は，僅かしか同意できなかった。その後文通は休止した。というのもアンドレーゼン博士が，1934年の終わりに，自分は仕事がぎっしりと詰まりすぎているので改訂版の出版は遅れるであろうということを原告に伝えたからである。1934年11月７日の手紙において，アンドレーゼン博士は，『回想記』はだいたい1935年のイースターの頃には新しく出版されるであろうということを伝えた。原告はその後，改訂版についてさらに耳にすることはなかった。1935年の秋に突如として改訂版が出版されるまでは。」(14)

以上のような『回想記』の再版の背景を踏まえた上で，次節では，第４／５版と，第４／５版が改訂の直接の対象としたと考えられる第３版を比較対象として取り上げ，第４／５版の『回想記』の性格や位置付けについて，往復書簡を織り交ぜながら考察を加える。なお往復書簡は，1933年９月と10月の間に集中的に交わされており，本稿においてもそれらの時期に交わされた往復書簡を中心史料として用いる。

３．『回想記』第４/５版におけるリーツと田園教育舎の書き換え

まず最初に，第３版と第４／５版との異同を明確にするために，双方の目次を以下に示す。

【第3版】（マイスナー編）

故郷の土地
ドイツの学校にて
ドイツの大学にて
修業と遍歴の時代
イルゼンブルク
ハウビンダ
ビーバーシュタイン
闘争の時代
田園教育舎の静かな拡大と
　　内部の強化の時代（1909-1914）
ユッタ・フォン・ペーターゼン
イルゼ河畔の田園孤児院
世界大戦
あとがき

【第4/5版】（アンドレーゼン編）

（はじめに）
故郷の土地
ドイツの学校にて
ドイツの大学にて
修業と遍歴の時代
イルゼンブルク
ハウビンダ
ビーバーシュタイン
闘争の時代
田園教育舎の静かな拡大と
　　内部の強化の時代（1909-1914）
ユッタ・フォン・ペーターゼン
イルゼ河畔の田園孤児院
世界大戦の時代の教育舎
世界大戦における志願兵として
編者のあとがき
ヘルマン・リーツの軍事郵便から
ヘルマン・リーツ没後の田園教育舎

目次から窺えるように，編者は異なってもリーツの遺稿を編集したものであるという性格から，『回想記』の構成自体に大きな違いはないと言える。第一次世界大戦に関する章について，第3版の「世界大戦」に対して第4/5版では「世界大戦の時代の教育舎」，「世界大戦における志願兵として」と章が増えているが，これは1章構成であったものを2つに分けて2章構成にしたものであり内容が特段増えたわけではない。もちろん2章立てにしたこと自体は重要な相違点のひとつであるが，記述内容はほぼ同一である。

そうした中で，構成上の改訂箇所として，基軸となる「はじめに」と「おわりに」を最初に見ていきたい。まず「はじめに」に関して，第4/5版では1頁であるが，第3版では存在しなかった「はじめに」が新たに加えられた（目次の前に書かれていることから実際には目次の中には掲載されていないので，上の表では括弧付けとしている）。その「はじめに」では，「細かな文体上の誤差は別として，全体的にオルジナルのテキストを復元することは亡くなった人に対する義務であると編者は思っている。戦争時についての未完の章も補足され，軍事郵便の手紙と短い締めくくられた報告によって補われた」[15]と述べられている。飽くまでもリーツの遺稿を尊重するというのがアンドレーゼンの立場であるが，リーツを理解するためにはリーツの従軍体験は不可欠であると理解しており，第4/5版では第一次世界大戦に関する部分を増やしたという立場を表明している。第一

次世界大戦中のリーツの書簡を掲載した「ヘルマン・リーツの軍事郵便から」という新しい章が加わったのはそのためである。

第二に，「あとがき」においても明らかな相違が見られる。「あとがき」から「編者のあとがき」へと表題を変えたという形式的な書き換えに留まらず，アンドレーゼンはマイスナーの「あとがき」を内容的にも完全に書き換えたのである。マイスナーが書いた第3版の「あとがき」では，リーツが亡くなって年月が浅いということも反映して生前のリーツを偲ぶ内容となっており，もっと体を大事にしていればもう少し長生きできたであろうこと，田園教育舎運動の指導者として未だにリーツの精神は息づいていること，リーツの人生とは日々新しきものを目指して行動するものであったこと，そしてリーツの思想は著作からよりも人生から直接学ぶべきであること，などが述べられている[16]。特に最後の点に，著作ではあってもリーツの人生が描かれた『回想記』を出版することの意義を認めている。それに対してアンドレーゼンが書いた第4/5版の「あとがき」では，リーツを理解するためには第一次世界大戦時の記述が不可欠であるという，「はじめに」でも表明された立場に従って，志願兵としての第一次世界大戦への従軍から病による帰還までのリーツの従軍体験が述べられ，戦地に赴くことを教え子たちに呼びかける演説までもが記されている[17]。

加えて，リーツの人物像を明らかに意図的に書き換えている箇所も見られる。第3版では，「リーツは政治的保守主義に属することはほとんどなかったし，また同じくその反対のグループに属することもなかった。我々国民の将来についての不安と希望と計画において，リーツは誰からも代弁されることはない」[18]と，政治的な派閥といったものを超越した唯一無二の存在としてのリーツを描いている。それに対して第4/5版では，「燃えるような関心をもって，リーツはベルリンにおけるスパルタクス団の闘争を非難した。すなわち共産主義と社会民主主義の克服こそがリーツにとっては我々の祖国の再生の前段階であると映ったのである」[19]と，リーツを典型的な反共産主義者・反社会民主主義者として位置付けている。そして続けて，「なるほど，ドイツの再生の兆候に向けたかすかな光とその内的な回復を体験せずして，1919年6月12日に亡くならなければならなかったことは，リーツの運命において最も辛いことであった」[20]と，ヒトラー内閣の成立を目にすることなく亡くなったリーツの「無念」が述べられている。つまり，なんらかの政治的立場に与することなく独自の世界観を築いていったと位置付けられた第3版でのリーツを，アンドレーゼンは，ナチズムの先駆者としてのリーツへと書き換えていったのである。

このような第3版と第4/5版の相違の基本的な路線を踏まえたうえで，再版に際して改訂された，あるいは結果的には改訂されなかったがアンドレーゼンが改訂しようとした箇所のうちのいくつかに焦点を絞って，アンドレーゼンとユッタ・フォン・リーツの往復書簡と照らし合わせながら以下に取り上げる。

(1) 題目

初版～第3版の題目は，リーツの遺稿自体の名称である『あるドイツ人教育者の生活と労働について』(Von Leben und Arbeit eines deutschen Erziehers) であるが，第4/5版ではシンプル

に『ヘルマン・リーツー回想記』(Hermann Lietz. Lebenserinnerungen) という題目で出版された。ただし，結果的には反映されなかったものの，このような題目についても論議がなされていた。アンドレーゼンは再版に際して，題目の決定は極めて重要であると認識し，題目を変更しないように主張するユッタ・フォン・リーツに対して，次のように述べている。

「ヘルマン（リーツー引用者）が新しいドイツのために提言しなければならなかったであろうことを，題目を通じて絶対に表現しなければなりません。そうでなければ，『回想記』を再版する必要はなくなるのです。」[21]

題目とは再版に当たっての立場を明示するものであるため，旧版の題目からの変更は当然のこととしたうえで，ヒトラー内閣に期待したであろうリーツの認識に「忠実」であることが重視された。また一旦は了承された『ヘルマン・リーツ，新しいドイツのある教育者ならびに先駆的闘争者(Hermann Lietz, Ein Erzieher und Vorkämpfer des neuen Deutschlands)』という題目に対して次のように評価している。

「この題目の対抗案はおそらくないでしょう。この題目は，現在リーツが，多くの方面から『民族社会主義の先駆者』と称され，彼の著作『祖国の危機と期待』(Das Vaterlandes Not und Hoffnung) は民族社会主義者の思想を含んでいるという事実を反映したものであります。」[22]

リーツへの「忠誠心」から，ナチズムの先駆者としてリーツを位置付けるという立場を表明しており，こうしたアンドレーゼンの認識自体が，リーツの書き換えにつながるのである。

(2) イルゼンブルク校の日課

第4/5版では，14パラグラフにわたって，1898年に設立された最初の田園教育舎であるイルゼンブルク校の日課についての記述が新しく加えられている。その箇所では，午前中は教科学習，午後は身体的活動を基調とし，一日に何度も詩や名言などの朗読を取り入れたイルゼンブルク校での一日の教育活動の様子が具体的に描かれている。そして，こうした活動を通じて，強い連帯精神や密接な友情が生まれ，献身的で祖国愛をもち，誠実で正直な，理想とすべき青少年の育成がなされると結論付けられている[23]。この箇所の改訂に関して，アンドレーゼンによる次のような記述が参考になる。

「イルゼンブルクの時間割が『回想記』に取り入れられるべきであり，それを通じて教育舎について知らない読者は，具体的なイメージを得ることができる。またイルゼンブルク校のイメージは，『労働奉仕』を具体的に示す上でも，模範的なものである。」[24]

このようにイルゼンブルク校の日課を掲載する理由として，「労働奉仕」(Arbeitsdienst) のモデルとしての役割を挙げている。ヒトラー内閣の成立後に労働奉仕が制度化され，1935年には「帝国労働奉仕」(Reichsarbeitsdienst) として義務化されたが[25]，アンドレーゼンは，田園教育舎での教育活動を労働奉仕と結び付けて，田園教育舎の歴史を書き換えたのである。

(3) 「ユダヤ人」についての表記

第4/5版では，田園教育舎の再建に関する箇所において，次のパラグラフが新しく付け加えられている。

> 「一時的に私はユダヤ系の銀行に依存するようになった。その債務のための利子は大変に重苦しかった。ユダヤ系の銀行との繋がりを解消し，最後の手形を破ることができ，そしてまたお金を工面するためにもう二度と銀行へと行く必要がなくなったときというのは，私の人生の中でも最も愉快な日々の中のひとつであった。しばしば指を差し出した方がまだましであった。」[26]

リーツの反ユダヤ主義者としての側面については広範に指摘されているが[27]，ここでは「指を差し出した方がまだましであった」という「ユダヤ人」に対するステレオタイプ的な誇張表現をも用いられ，リーツにおける反ユダヤ主義が強調されている。

このような「ユダヤ人」に関する内容は，アンドレーゼンが往復書簡の中でも強く関心を向けていたものである。「『ユダヤ人』(Jude) という呼び方は『イスラエル人』(Israelit) という呼び方よりも今日ますます中立的なものではなくなってきている」[28]ため，意図的に「ユダヤ人」と表記を換えることに反対するユッタ・フォン・リーツに対して，アンドレーゼンは書簡の中で以下のように述べている。

> 「私は『イスラエル人』の代わりに『ユダヤ人』という言葉を使いたいのです。なぜならば『イスラエル人』という表現は技巧を凝らした不自然なものであると私には思え，『ユダヤ人』という表現よりも大いに軽蔑的です。私たちは，教育舎において，私の考える限り，『イスラエル人』の生徒について語ったのではなく，『ユダヤ人』の生徒について語ったのです。」[29]

「イスラエル人」表記と「ユダヤ人」表記が混在している旧版に対して，「イスラエル人」という表記は「技巧を凝らした不自然なものであり軽蔑的である」という，こじつけとも解釈できる表現を用いて，リーツの生涯や田園教育舎の歴史を書き換えることを試みたのである。ちなみにドイツ田園教育舎の1924年の年刊誌『ドイツの課題と田園教育舎』においてアンドレーゼンは，人種や国籍について極めて寛容であったリーツが，ハウビンダ校でのユダヤ人教師・生徒の離反などの「現実」に直面する中で，反ユダヤ主義の方向へと性格を転換させたことについて述べている[30]。すなわ

ちアンドレーゼンは，根本的にリーツは人種差別や民族主義を主張する人物ではなかったことについて認識していたのである。

第4/5版が出版された後に送られた，1935年12月7日付けの書簡においてアンドレーゼンは，「『ユダヤ人』と『イスラエル人』の双方の語句が定まらずに使用されていることに対して，双方を統一させるという文体上の統一への要望が私にはまだあります」[31]と述べていることに加え，筆者の確認しうる限りにおいて，「イスラエル人」という表記と「ユダヤ人」という表記の間に変更がないことから，結果的にアンドレーゼンの主張は反映されなかったようである。しかしリーツと反ユダヤ主義をめぐる問題は，リーツと田園教育舎の歴史の書き換えの試みにおいて，極めて大きな問題をはらんだ点であったと言える。

(4) 男女共学

第3版および第4/5版の双方に共通する部分であるが，田園教育舎における男女共学に関して以下のような記述が見られる。

> 「感情，思考，意志そして能力における両性の間の根本的な差異を決して度外視すべきではなく，さもなければ少年にも少女にも苦痛だけが与えられることになる。特に大都市出身の少年と少女は，共同での全寮制教育の大胆な試みに適していないということを忘れるべきではない。私たちは常に少数の少女たちに制限し，しかもその兄弟が既に教育舎に在籍している少女たちを主として受け入れた。」[32]

リーツがヴィネケン（Gustav Wyneken, 1875-1964）やゲヘープ（Paul Geheeb, 1870-1961）らと対立した重要な要因のひとつに男女共学をめぐる確執があったが[33]，この記述からも，男女共学に慎重な立場をとっていたリーツの態度が窺われる。そしてさらに第4/5版では，この箇所に対して，以下のような注釈が新しく付け加えられる。

> 「この記述から判明されるように，リーツは同時代人に強制されて，疑念をもって制限した形で，教育舎に男女共学を導入することを試みた。彼の上の叙述は男女共学に大変に批判的なものであり，ほとんど男女共学への拒絶と同等の内容である。男女共学の実験はすでに最初のうちから困難に直面していたのである。（初級段階では60～70人の少年に対して12人ほどの少女，中級・上級段階では70～80人の少年に対して3～4人の少女であったため－引用者）教育舎での実験は男女共学とは呼べないものである。それゆえにこの実験は，男女共学の証拠として有力なものではない。」[34]

アンドレーゼンはこうした注釈を敢えて付すことによって，男女共学に極めて否定的な人物としてのリーツを強調したと言える。ただしそもそもアンドレーゼンはリーツ以上に男女共学への反対者

であったと言え，そのことはビーバーシュタイン校を完全な男女別学へと転換させたことなどに現れている。ちなみにアンドレーゼンはそのような措置をとった理由として，第1に女子生徒の存在は学校の雰囲気にそぐわない，第2に男女共学は生徒に性的衝動を喚起させる，第3に女子生徒の存在は他人の目ばかりを気にするという気持ちを生徒たちに生み出す，第4に女子生徒に希少価値を与えることは女子生徒の教育上好ましくない，という4点を挙げている(35)。

『回想記』の再版に当たって，男女共学をめぐるリーツの位置付けは，先の「ユダヤ人」表記と並んでアンドレーゼンが最も関心を示していた内容であったと言える。アンドレーゼンは1933年9月28日付けの書簡で以下のように述べている。

「男女共学に関する記述は不要です。なぜならばヘルマンはその領域において実際には上辺だけで行っていたのであり，男女共学に対するリーツの試みは生徒が少数であったために教育的には価値のないものであり，さらにそれは失敗に終わりました。教育舎はもう男女共学を実施していないので，その記述は誤解を招くことになります。」(36)

ヘルマン・リーツ学校での男女共学を極めて不徹底のものととらえたうえで，男女共学に関する記述を残すことはリーツへの「誤解」につながるため書き換えることを主張しているのである。また1933年10月18日付けの書簡でも以下のように記している。

「新しい編集に際しては，初版の編集と同じように，教育舎の事実にのみ奉仕するべきです。私はまた，旧版の1ページ半を省くことに対するあなたの同意を頂くことをお願いしたいのです。旧版の283ページの10～13行目を削除してくださいますね。またそのことを通じてヘルマン自身が行った男女共学への制限の事実を受け入れてくれますね。というのも，このような記述はあたかも教育舎において実際に男女共学が行われていたかのような印象を世間に与えることになるかもしれないのですが，それは誤りだからです。」(37)

ここでアンドレーゼンが述べている「旧版の283ページの10～13行目」とは，先に掲げた『回想記』の本文を指しており，また「旧版の1ページ半」とは男女共学に関する内容が該当する。結果的にこれらの箇所は削除されることはなく新しく注が付け加えられるに止まったが，このようにリーツの遺稿を具体的なページを示して書き換えることを通じて，男女別学を強く主張したリーツを描こうとアンドレーゼンは考えていたのである。

(5) 他の田園教育舎系学校の指導者との関係

ハウビンダ校における教師たちの離反(38)に関する記述の中で，第4/5版では，以下のようなパラグラフが新しく付け加えられている。

「機関誌『アンファング』(Anfang) を通じて，ヴィッカースドルフ自由学校共同体の設立の精神が明らかになった。そこで培われた精神は，私と私の教育舎にとっては十分に異質のものであった。(中略) すなわちそこでは，両親と教師は子どもたちに対して各々の権利が奪われており，いずれにせよ両親と教師の権利は低められているのである。ヴィッカースドルフではあらかじめ，ブルジョアジーを犠牲にしてプロレタリアートを賞賛した社会民主主義的な扇動と同様のものが起こっているのである。」(39)

すなわち，リーツ系の田園教育舎とは異なって，社会民主主義的な「扇動機関」であるとヴィッカースドルフ自由学校共同体をリーツがとらえたとする内容が付け加えられたのである。このことに関連して，9月28日付けでアンドレーゼンが記した書簡の中で，次のように述べられている。

「ヴィネケンとゲヘープは今日あらゆる意味で生き残っている。彼らの活動は田園教育舎の活動をひどく害したものであり，リーツの思想は彼らによって完全に歪曲された。彼らのイニシャルは，事情に通じている者には分かることである。しかしながら彼らは，田園教育舎での教育の歴史において，真実を浮き彫りにするためにも重要なのである。」(40)

このようにヴィネケンやゲヘープを，リーツの田園教育舎運動に対する「異端」として位置付けることによって，リーツの教育実践・教育思想の「正当性」を強調することをアンドレーゼンは試みたのである。

以上，第4/5版の再版に際してアンドレーゼンが改訂した，あるいは改訂を試みた箇所の一部について，「はじめに」と「あとがき」のほか，5点にわたってアンドレーゼンの主張とともに取り上げてきた。アンドレーゼンは，『回想記』の書き換えを通して，ナチズムの先駆者としてリーツを明確に位置付けようと試みたのである。次節においては，出版された『回想記』の法的な立場について，ハーナウの地方裁判所の裁判記録に基づいて取り上げる。

4.『回想記』第4/5版に対する裁判所の判決

1933年10月24日付けでアンドレーゼンが送った「あなたが態度を変えないため，もうこれ以上手紙の交換の必要はありません。『回想記』の再版について私には何の権限もないように思います」(41)という書簡を機に両者の交流は一端途絶えるも，2節で述べたように，1935年11月に，ユッタ・フォン・リーツの了解なく『回想記』第4/5版は出版された。この再版に対してユッタ・フォン・リーツは，1935年12月10日にアンドレーゼンに宛てた書簡の中で，『回想記』の個々の内容について同意しておらず，自分の夫の本であるため『回想記』の著作権は自分にあることを主張して異議を申し立てている(42)。そして彼女は，ヘルマン・リーツ財団と5人の財団の理事を相手にハーナウの

地方裁判所に訴訟を起こした[43]。

裁判の結果，裁判の費用は被告側が負担することに加えて，『回想記』の著作権はユッタ・フォン・リーツにあるという判決が下された[44]。この判決の決め手となったのは，1920年10月13日に，ユッタ・フォン・リーツと，『回想記』を出版したラントヴァイゼンハイムス出版社の間で締結された，「リーツの遺稿に関する出版契約」であった。特にその第1条の「ユッタ・フォン・リーツは，すべての著作物の出版権をラントヴァイゼンハイムス出版社とその権利継承者に委任する」[45]という規約から，遺稿の著作権をもつユッタ・フォン・リーツが，出版社に出版権を委託するということが読み取れるのである。その他にも「出版契約」では，印刷された本のうち上質の紙を用いた装丁の本100部はユッタ・フォン・リーツのものとなるというユッタ・フォン・リーツへの特別待遇も記載されていた[46]。

この判決の結果，『回想記』の再版の権利は明らかにヘルマン・リーツ財団に属しているため裁判の必要はないと述べるアンドレーゼンの主張は退けられることになり，原告の許可なくして「まえがき」や「あとがき」などを変更することはできない（世間は原告の責任のもとに『回想記』が改変されたとみなすということも考慮に入れて）ことが述べられた[47]。第4/5版『回想記』は，ハーナウの地方裁判所での判決において，極めて違法性をもつことになったのである。

5．おわりに

以上考察してきたように，ヒトラー内閣の成立によってリーツの教育課題が実現されたと考えたアンドレーゼンは，ヒトラー内閣の成立を好機ととらえ，リーツの『回想記』の再版を主張した。その際にアンドレーゼンは，1）リーツをナチズムの先駆者として位置付ける，2）イルゼンブルク校を「労働奉仕」のモデルとして位置付ける，3）「イスラエル人」という表記をすべて「ユダヤ人」という表記で統一する，4）男女共学に関する記述を削除する，5）他の田園教育舎系学校の指導者を否定的にとらえる，といったことなどを改訂の内容としてユッタ・フォン・リーツに提案した。加えて最終的に出版された第4/5版においても，リーツの第一次世界大戦への従軍体験が重視されていることや，反共産主義・反社会民主主義者としてリーツが位置付けられていることから，リーツをナチ時代の時代思潮に適合させる形で書き換えて再版しようとしたアンドレーゼンの明らかな試みを見出すことができる。

リーツに反ユダヤ主義的な側面や男女共学を否定的にとらえる側面があったことは既に広く確認されているが，アンドレーゼンにとって旧版の『回想記』のままでは充分ではなく，リーツをナチ時代の時代思潮に適合させるためにさらにそれらを強調する必要があったのである。すなわち，アンドレーゼンを媒介としてリーツはヴァイマール時代からナチ時代にかけて単純に継承されただけではなく，アンドレーゼンにおける明らかな書き換えを通じてリーツの「継承」がなされた側面があったことが窺える。リーツの教育実践・教育思想はナチズムと極めて類似していたと言える側面をもちながらも，その一方で，決してそれ自体がナチ体制へと継承されるものとは言えなかったの

である。

註

(1) Hansen-Schaberg, Inge: Haubinda. Die Keimzelle der Landerziehungsheimbewegung, in: Röhrs, Hermann/Pehnke, Andreas (Hg.): *Die Reform des Bildungswesens im Ost-West Dialog. Geschichte, Aufgaben, Probleme,* Frankfurt am Main 1994, S.107-109; Koerrenz, Ralf: *Landerziehungsheime in der Weimarer Republik. Alfred Andreesens Funktionsbestimmung der Hermann-Lietz-Schulen im Kontext der Jahre von* 1919 *bis* 1933 (künftig: *Landerziehungsheime in der Weimarer Republik*), Frankfurt am Main 1992, S.192-225.

(2) Feidel-Mertz, Hildegard: *Schulen im Exil. Die verdrängte Pädagogik nach* 1933 (künftig: *Schulen im Exil*), Reinbeck 1983, S.25f.

(3) Vgl. Koerrenz, *Landerziehungsheime in der Weimarer Republik*, S.226-240; König, Karlheinz: Nur angepaßt oder überzeugter Nationalsozialist? Alfred Andreesen und die Landerziehungsheime im Nationalsozialismus. Zur Revision eines pädagogischen Mythos, in: *Jahrbuch für Historische Bildungsforschung*, Bd.7 (2001), S.61-88.

(4) Feidel-Mertz, *Schulen im Exil*, S.25f.

(5) Koerrenz, Ralf: *Hermann Lietz. Grenzgänger zwischen Theologie und Pädagogik. Eine Biographie*, Frankfurt am Main 1989, S.12-16.

(6) Vgl. Lesanovsky, Werner: „Was Lietz pädagogisch erstrebte, hat Hitler politisch durchgesetzt". Schulreformerische Traditionen und nationalsozialistische Schulpolitik in Thüringen, in: *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.44 (1998), S.523-542; Alphei, Hartmut: Idylle zwischen Verweigerung und Verstrickung. Die Landerziehungsheime in der Zeit des Nationalsozialismus, in: Ziegenspeck, Jörg W. (Hg.): *Eine Idee wird Hundert.* 100 *Jahre Landerziehungsheime in Deutschland*, Lüneburg 1998, S.27-40.

(7) 川瀬邦臣，ヘルマン・リーツ著『田園教育舎の理想 ── ドイツ国民教育改革の指針』明治図書，1985年，26頁。

(8) Lietz, Hermann: *Hermann Lietz. Lebenserinnerungen. Neu herausgegeben von Alfred Andreesen* (künftig:*Lebenserinnerungen*), Weimar 1935 (4./5. Aufl.), Vorwort.

(9) Andreesen, Alfred (Hg.): *Die Arbeitsschule und die Deutschen Landerziehungsheime* (17.*Jahrbuch der deutschen Landerziehungsheime*), Osterwick/Harz, Rückseite.

(10) Andreesen, Alfred: Lietz und die Bewegung der Landerziehungsheime und freien Schulen, in: *Die Erziehung*, Jg.2, Ht.7 (1927), S.422.

(11) Andreesen, Alfred: Landerziehungsheime, in: Clostermann, Ludwig/Heller, Theodor/Stephani, P. (Hg.): *Enzyklopädisches Handbuch des Kinderschutzes und der Jugend-*

fürsorge, Leipzig 1930 (2. Aufl.), S.429.

(12) Alfred Andreesen an Jutta von Lietz, den 28. September 1933, in: Bundesarchiv Koblenz (künftig:BAK) N1148/17: Akten zum Prozeß zum 4./5. Auflage der Lebenserinnerungen.

(13) Jutta von Lietz an Alfred Andreesen, den 21. September 1933, in: BAK N1148/17.

(14) Landgericht Zivilkammer I , den 11. Juni 1936, in: BAK N1148/17.

(15) Lietz, *Lebenserinnerungen*, Vorwort.

(16) Lietz, Hermann: *Von Leben und Arbeit eines deutschen Erziehers. herausgegeben von Erich Meißner* (künftig: *Von Leben und Arbeit eines deutschen Erziehers*), Veckenstedt am Harz 1922 (3. Aufl.), S.314-316.

(17) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.195-197.

(18) Lietz, *Von Leben und Arbeit eines deutschen Erziehers*, S.315.

(19) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.197.

(20) ibid.

(21) Alfred Andreesen an Jutta von Lietz, den 23. September 1933, in: BAK N1148/17.

(22) 註 (12) の史料参照。

(23) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.91-94.

(24) 註 (12) の史料参照。

(25) 宮田光雄『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店，1991年，373-383頁。

(26) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.162.

(27) リーツの反ユダヤ主義については，川瀬邦臣「H. リーツの共同体教育論」『東京学芸大学紀要第1部門（教育科学）』第47集（1996年），229-238頁，などを参照。

(28) 註 (13) の史料参照。

(29) 註 (12) の史料参照。

(30) Andreesen, Alfred: Die deutsche Aufgabe und die Land=Erziehungsheime (Klärung und Entscheidung.), in: Ders. (Hg.): *Die deutsche Aufgabe und die Land=Erziehungsheime,* Veckenstedt am Harz 1924, S.65f.

(31) Alfred Andreesen an Jutta von Lietz, den 7. Dezember 1935, in: BAK N1148/17.

(32) Lietz, *Von Leben und Arbeit eines deutschen Erziehers,* S.283; Lietz, *Lebenserinnerungen,* S.170.

(33) 男女共学をめぐる対立については，山名淳「ドイツ田園教育舎における教師統制の強化 ── ハウビンダ校における二度の教師離反を中心として ──」『日本の教育史学』第39集（1996年），249-265頁，渡邊隆信「20世紀初頭ドイツにおける男女共学の実験 ── オーデンヴァルト校生徒の日常生活 ──」『兵庫教育大学研究紀要第1分冊』第18巻（1998年），45-57頁，を参照。

(34) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.170.

(35) Andreesen, Alfred: Warum lehnen wir die Koedukation in Bieberstein ab?, in: *Die neue*

Erziehung, Jg.8, Ht.2 (1926), S.105-107.

(36) 註（12）の史料参照。

(37) Alfred Andreesen an Jutta von Lietz, den 18. Oktober 1933, in: BAK N1148/17.

(38) 離反事件については，山名前掲論文を参照。

(39) Lietz, *Lebenserinnerungen*, S.144.

(40) 註（12）の史料参照。

(41) Alfred Andreesen an Jutta von Lietz, den 24. Oktober 1933, in: BAK N1148/17.

(42) Jutta von Lietz an Alfred Andreesen, den 10. Dezember 1935, in: BAK N1148/17.

(43) 註（14）の史料参照。

(44) 同上。

(45) Verlagsvertrag über Von Leben und Arbeit eines deutschen Erzieher, in: BAK N1148/17.

(46) ibid.

(47) 註（14）の史料参照。

Characterization of *Deutsches Landerziehungsheim* in the Nazi Era by focusing on the A. Andreesen's Rewrite of *Lebenserinnerungen* by H. Lietz

Tomohiro EGASHIRA

Abstract

The purpose of the present paper is to elucidate the characters of H. Lietz and Deutsches *Landerziehungsheim* rewritten by A. Andreesen in the Nazi Era, which was originally published by H. Lietz. This paper is a case study in consideration of the relationship between *Reformpädagogik* (new education) and Nazism.

The present study is based on mainly dealing with the two materials. The first material is *Lebenserinnerungen* (memories) by H. Lietz, which were published 1920, 1921, 1922, and 1935. In the present study the following two versions were used: the 1922 version edited by E. Meißner and the 1935 version edited by A. Andreesen. Through comparison of both versions, the author assessed the characters of H. Lietz and *Deutsches Landerziehungsheim* modified by A. Andreesen. The second material is correspondences between A. Andreesn and Jutta von Lietz, who was the wife of H. Lietz and objected to revision of *Lebenserinnerungen.* Through analysis of these correspondences in which they debated on revision of *Lebenserinnerungen,* the Andreesen's attempt to rewrite the characters of H. Lietz and *Deutsches Landerziehungsheim* can be manifested.

In the present paper, the author discussed the Andreesen's attempt to rewrite *Lebenserinnerungen* by H. Lietz from the following five points;

1. Lietz was a pioneer of Nazism;
2. *Ilsenburg* was a model of *Reichsarbeitsdienst*;
3. Lietz hated Jewish;
4. Lietz objected to coeducation;
5. Lietz regarded G. Wyneken and P. Geheeb as the heretic.

Many researchers have stated that educational ideas and practices of Lietz were similar to those of Nazism. In contrast with them, the author considers that H. Lietz himself cannot be connected with Nazism but that he can be connected with Nazism for the first time through the intentional interpretation by A. Andreesen.